

Title	14世紀地方言文学地図 : 口マンスと主要作品を中心として
Sub Title	14th-Century literary atlas
Author	池上, 忠弘(Ikegami, Tadahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.115- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

14世紀地方言文学地図

—ロマンスと主要作品を中心として—

池 上 忠 弘

これまで14世紀文学地図が試みられたのは、Kenneth Sisam 編の *Fourteenth Century Verse and Prose* (1921, Oxford) の巻頭に掲げられた簡明なものだけである(第1図)。そこで、もう少し精しい図を作れば、文学のすう勢が一層明らかになるだろうと考えてここに試みることにした。前半では ME 語り物文学の主体を構成する metrical romances (散文の romances は15世紀中頃からだからここでは除外) だけを扱い、さらにそれから派生してくる問題点を考察する。ついで後半では、14世紀全体の、文学史で普通扱われるような主要な作品群を素材とする。今回は、religious and secular lyrics にはあまり触れないであろう。

現在の各作品の創作年代・場所はほとんどいくつかの根拠に基く推定であり、研究者によって意見の相違を生んでいるが、これもやむをえないことである。しかしできるだけ厳正を期し、現在までの穏当な説をとった。基本的資料としては、J. E. Wells, *A Manual of the Writings in Middle English, 1050-1400* (New Haven, 1916) with Nine Supplements (1919, 23, 26, 29, 32, 35, 38, 41, 45); W. L. Renwick and Harold Orton, *The Beginnings of English Literature to Skelton 1509* (1939; Third Edition Revised, 1966, London); Laura H. Loomis, *Mediaeval Romance in England* (1924; 1960, New York) および厨川文夫「中世の英文学と英語」(昭和26年、東京)に拠った。



第 1 図

(1)

一応1300年から1400年の間に創作されたと推定される metrical romances は全部で58篇ある (Chaucer のものは除く)。これを題材などの点を無視して、詩型だけで分類してみると次のようになる。そこにあらわれること実は A. McI. Trounce, 厨川文夫教授などの研究すでに知られていてあることである。⁽¹⁾

I)	short couplets	14
II)	12-line tail-rhyme	23
III)	alliterative long lines	10
	(うち rhyme を併用した strophe のもの 1 を含む: <i>Sir Gawain and the Green Knight</i>)	
IV)	その他	11
a.	16-line tail-rhyme (<i>Sir Degrevant, Sir Percyvelle of Galles, Awowyng of Arthur</i>)	3
b.	13-line stanza (<i>Awntyrs off Arthure</i>)	1
c.	8-line stanza (<i>Le Morte Arthur</i>)	1
d.	6-line stanza (<i>Octavian¹ (earlier version)</i>)	1
e.	couplets (<i>Song of Roland</i>)	1

次のものは同一作品中で前と後で違った詩型を用いている。

f.	short couplets + 3-stress couplets (<i>Tale of Gamelyn</i>)	1
g.	6-line tail-rhyme + short couplets (<i>Sir Beues of Hamtoun</i>)	1
h.	septenary couplets + 6-line tail-rhyme (<i>Sir Firumbras</i>)	1
i.	4-line stanza + 8-line stanza (<i>Sowdone of Babylone</i>)	1

この分類によって、三つの “school” ともいえるものが歴然と存在した

ことがわかる。しかもその「流派」はある特定地域にかたまる傾向にあるのが認められる。

(I) **Short couplets** が英詩で最初に使われたのは *Lambeth Homilies* (c. 1200) 中の *Pater Noster* といわれる。13世紀中頃にあらわれた最もはやいイギリスのロマンス, たとえば *King Horn*, *Havelok the Dane*, *Floris and Blancheflur* はいずれも, フランス詩の影響から生れた short couplets で書かれ, 中東部・南部(西寄り)地方のものである。元来貴族階級をその聴衆とした Anglo-Norman あるいは French のロマンスの adaptation であり, popularization であるイギリスのロマンスは, 定石通り short couplets で書くことによって始ったわけである。これが14世紀に入ると, ほとんど England 全域にわたってみられるので, short couplets の流行をある特定の地域に限定することはできないけれども, 比較的 S-E Midland, Kentish, Southern に多いようと思われる。この流行が1325年頃より急に衰退するのが注目される。フランス的であるこの詩型も伝統的な頭韻語句をよく使っている点に留意する必要がある。

(II) 13世紀末から15世紀中頃にかけて, Northern, N Midland, N-E Midland 地方で **12-line tail-rhyme romances** (あるいはその variant) ⁽²⁾ が流行した。A. McI. Trounce はこの流行の中心をもう少し南の East Anglia に置いている。この詩型は Latin Church poetry の影響といわれるが, Latin では主として lyrics に, French では serious religious works に用いられているので, これをロマンスに利用したことはイギリス独自のものといえよう。Robert Mannyng of Brunne は short couplets で書いた *Chronicle* (1338) の中 (Prologue, 85-90) で, 新しい “ryme couwee” のこった派手好みを攻撃しているが, この詩型を使った現存する 46 poems のうち, 33 が romances である事実は, ロマンスにおける大流行を如実に物語っている。事実, ロマンスの中でも主流である。

12-line tail-rhyme romances は後期になると北へ拡がって行くようである。この詩型のロマンスにも OE poetic tradition の words や tags が顕著に認められる。その面から次のように分類できる。

- (1) full alliterative style を使用するもの。北寄りに多い。
- (2) alliterative style を控え目に使用するもの。E Midland 寄りに多い。

北部ものと東部ものとでは多少 style が違うようである。Trounce はさら⁽⁴⁾に、この種のロマンスの三段階の発達を考えている。

なお、N-W Midland 方言で書かれたものが 1 篇 (*Sir Amadace*) あるが、元来東部地方ものの西部版であろう。

(Ⅲ) 外国、とくにフランスの影響が弱まると native stock の復活が見られる。宮廷で使われる日常言語も、14世紀中頃になるとそれまでのフランス語に取って代って英語が盛んに使われるようになる。庶民の言語はもともとからある地方色の濃い英語である。

14世紀中頃、突然 West Midland 地方に伝統的な **alliterative long lines** (OE のとは少し違う) で書いた作品が復活してあらわれ、さらに北に拡がり、15世紀には Scotland にまで及び、この流行は16世紀はじめまで続いた。1340年頃から1450年頃までを文学史では “Alliterative Revival” と呼んでいるが、どうしてこのような流行になったのか、よくわからない。Worcester 中心に OE 時代以来頭韻詩・頭韻散文の伝統が存続していたらしいし、また J. R. Hulbert は中央の国王に対する Mortimers, Bohuns, Beauchamps, Berkeleys などの辺境諸侯の対抗意識の結果と考えている。⁽⁵⁾ この流行はロマンスだけに限られる現象ではなく、他の文学 genres にも見られる大きな拡がりを持ったものである。Arthurian legend に関する作品、とりわけ Gawain を主人公にした作品が多いのは、この地方に a cult of Gawain があったかもしれないし、また pseudo-historical epic といった方がよい作品群には OE の heroic epic との伝統的継がりが考えられるかもしれない。⁽⁶⁾ また、これらはロンドンの文学と性格を異にする文学のようである。

頭韻詩には次の二系統が認められる。

- 1) 北方系。技巧的でかなり装飾性のつよい頭韻語句や詩型を用いたもの

2) 南方系。文学的な頭韻語句をあまり使用せず、平明な表現を用いるもの（例）*Piers Plowman*.

Alliterative long lines に rhyme をつけ strophe 形式にし、技巧をこらした *Sir Gawain and the Green Knight* や *Pearl* は、質的に provincial とはいえない例外的な存在であろう。E Midland 方言で書かれた *Chevalere Assigne* は、Northern あるいは N-W Midland 方言で書かれた原作を東部で写したのが現存しているのであろう。

(1) 1300—1325

a) short couplets

[1] <i>Sir Orfeo</i> (3 MSS)	shortly after 1300	S.
[2] <i>Lai le Freine</i>	beginning of the 14th c.	S.
[3] <i>Guy of Warwick</i> ¹ (earlier version) (6 MSS)	after 1300	N Midl.
[4] <i>Guy of Warwick</i> ³	after 1300	S-E Midl.
[5] <i>The Life of Alisaunder</i> (3 MSS)	not after 1325	Kent
[6] <i>Arthour and Merlin</i> (5 MSS)	not after 1325	Kent
[7] <i>Sir Degare</i> (6 MSS)	before 1325	S-W Midl.
[8] <i>The Seige of Troye</i> (3 MSS)	1300—25	N-W Midl.

b) 12-line tail-rhyme

(9) <i>Horn Childe</i>	1300—25	N Midl.
⑩ <i>Guy of Warwick</i> ² (the continuation and the sequel <i>Reinbrun</i>)	before 1325	S-E Midl.
⑪ <i>Amis and Amiloun</i> (4 MSS)	c. 1300	N-E Midl.
⑫ <i>Roland and Vernagu</i>	before 1325	N Midl.
⑬ <i>King of Tars</i> (3 MSS)	before 1325	N-E Midl.
⑭ <i>Sir Amadace</i> (2 MSS)	before 1325	N-W Midl.
⑮ <i>Sir Launfal</i>	1325—50	S-W Midl.

c) その他

<16> <i>Sir Beues of Hamtoun</i> (6 MSS)	c. 1300	S.
--	---------	----

(2) 1325—1350

a) short couplets

[1] <i>Ywain and Gawain</i>	1325—50	N.
[2] <i>Otuel</i>	before 1330	S-E Midl.
b) 12-line tail-rhyme		

③ <i>Libeaus Desconus</i> (6 MSS)	1325—50	S-E Midl.
-----------------------------------	---------	-----------

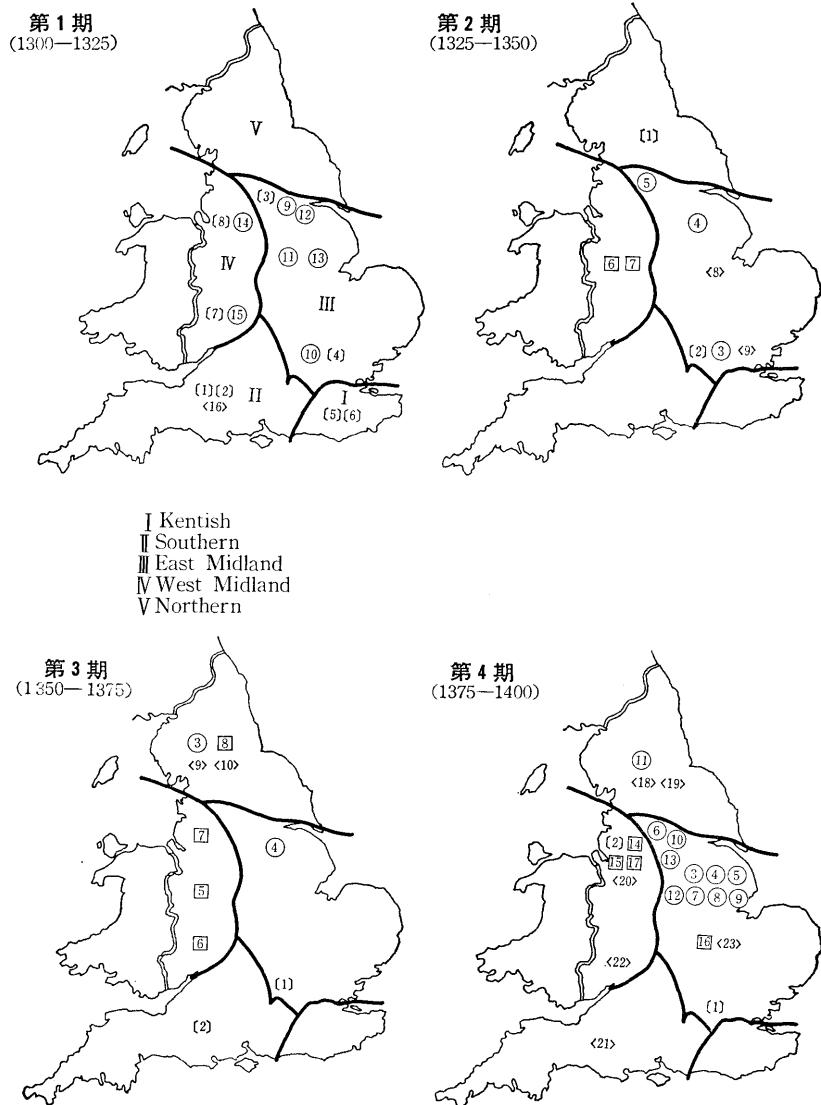
④	<i>Sir Eglamour of Artois</i> (4 MSS)	1340—50	N-E Midl.
⑤	<i>Ipomadon</i> (earlier version)	c. 1350 or earlier	N Midl.
c)	alliterative long lines		
⑥	<i>Alexander A</i>	c. 1340	W Midl.
⑦	<i>Alexander B</i>	c. 1340	W Midl.
d)	その他		
⟨8⟩	<i>Tale of Gamelyn</i> (16 MSS)	1340 or 50	E Midl.
⟨9⟩	<i>Octovian</i> ¹ (earlier version)	c. 1350	S-E Midl.
(3)	1350—1375		
a)	short couplets		
[1]	<i>Robert of Cisyle</i> (8 MSS)	before 1370	S-E Midl.
[2]	<i>Arthur</i>	1350—1400	S.
b)	12-line tail-rhyme		
③	<i>Octovian</i> ² (later version) (2 MSS)	c. 1350	N.
④	<i>Sir Isumbras</i> (6 MSS)	1350—75	N-E Midl.
c)	alliterative long lines		
⑤	<i>William of Palerne</i>	c. 1350	W Midl.
⑥	<i>Joseph of Arimathie</i>	c. 1350	S-W Midl.
⑦	<i>Sir Gawain and the Green Knight</i>	c. 1370	N-W Midl.
⑧	<i>Morte Arthure</i>	1350—1400	N.
d)	その他		
⟨9⟩	<i>Awntyrs off Arthure</i> (4 MSS)	c. 1350 or 1350—1400	N.
⟨10⟩	<i>Avowynghe of Arthur</i>	c. 1350 or 1350—1400	N.
(4)	1375—1400		
a)	short couplets		
[1]	<i>The Destruction of Jerusalem</i> ¹ (short couplet version (11 MSS)	1375—1400	S-E Midl.
[2]	<i>The Laud Troy Book</i>	c. 1400	N-W Midl.
b)	12-line tail-rhyme		
③	<i>Sir Gowther</i> (2 MSS)	1375—1400	N-E Midl.
④	<i>Sir Torrent of Portyngale</i>	1375—1400	N-E Midl.
⑤	<i>Athelston</i>	1375—1400	N-E Midl.
⑥	<i>Sir Triamour</i> (3 MSS)	1375—1400	N Midl.
⑦	<i>Le Bone Florence of Rome</i>	c. 1400	N-E Midl.
⑧	<i>Earl of Toulous</i> (3 MSS)	c. 1400	N-E Midl.
⑨	<i>Emare</i>	c. 1400	N-E Midl.
⑩	<i>Sir Cleges</i> (2 MSS)	c. 1400	N Midl.

⑪	<i>Duke of Rowlande and Sir Ottuell</i>	c. 1400	N.
⑫	<i>Sege of Melayne</i>	c. 1400	N-E Midl.
⑬	<i>Sir Gawene and the Carle of Carelyle</i>	c. 1400	N Midl.
c) alliterative long lines			
⑭	<i>The Gest Historiale of the Destruction of Troy</i>	c. 1375	N-W Midl.
⑮	<i>The Destruction of Jerusalem</i> ² (alliterative version)	(8-MSS)	
		1385—1400	N-W Midl.
⑯	<i>Chevalere Assigne</i>	1385—1400	E Midl.
⑰	<i>Alexander C</i> (2 MSS)	c. 1400	N-W Midl.
d) その他			
⑲	<i>Sir Degrevant</i> (2 MSS)	1375—1400	N.
⑳	<i>Sir Percyvelle of Galles</i>	1375—1400	N.
㉑	<i>Le Morte Arthur</i>	1375—1400	N-W Midl.
㉒	<i>Sir Firumbras</i>	1375—1400	S.
㉓	<i>Song of Roland</i>	c. 1400	S-W Midl.
㉔	<i>Sowdone of Babylone</i>	c. 1400	E Midl.

第1期 (1300—1325) では、13世紀から引続いて short couplets と 12-line tail-rhyme のロマンスが圧倒的である。しかも N Midlands と 南部一帯だけにかたまっている。各種のロマンスが揃ってはいるが、比較的、南部と S-W Midlands で書かれた Breton lais 関係の作品が多い。またエリザベス時代までよく知られていた *Guy of Warwick* や *Beues of Hamtoum* が生れている。この時期のロマンスはほとんど Auchinleck MS (1330-40) に含まれているものである。これは14世紀ロマンス関係では最も古い写本である。

第2期 (1325—50) になると、short couplets で書かれたロマンスがめっきり減少し、頭韻と stanza 形式が主力になる方向をとり、時代の推移が感じられる。北部の作品がはじめて現われ、さらに西部では頭韻詩のあらたな出現を迎える。将来の流行のきざしをみせはじめている。この時期では東部地方に作品が多い。

第3期 (1350—1375) はロマンス作成の中心が次第に西部と北部に移動



第 2 図

しつつあることを示している。その西部と北部ではアーサー王物語を扱った作品が多い。この時期のロマンスは Thornton MS (1430—40) と宗教関係の多い Vernon MS (1380—1400) に含まれているのが割に多い。なお、第2期と第3期を通じて作品数が少ない。これは打ち続く famines (もっともひどいのは 1315—21) や pestilence (1348—49, 61—62, 62, 69, 75—76), 百年戦争などの当時の社会情勢を反映し、娯楽へ目をむける余裕がなかったためであろうか。

第4期 (1375—1400) はロマンス全盛期で、その余勢は次の15世紀に引きつがれることになる。北西部、北東部、北部に作品群がほとんど集中し、ロマンスの流行は北辺において著しく、Scotland への波及を示している。これは反面、イングランドの中心である南のロンドンで新しい文学活動が起りつつあることを暗示しているのかもしれない。ふつうのロマンスに対する嗜好が、フランス文学の影響のつよい南部 (ロンドン) ではすでによわまってしまったせいであろうか。

12-line tail-rhyme の作品が依然多く、その中でも Breton lais 関係の復活と、いわゆる Eustace-Constance-Florence-Griselda legends の作品が N-E Midlands にかたまっている。そしてそれらは Cambridge University Library MSS に入っている作品が多い。

14世紀文学を、ひいては ME 文学を代表する Chaucer は第3期の中頃から、宮廷生活の忙しい合い間をぬってフランス文学の完全な影響下で創作を発表しはじめた。英語で書く以上、これまでの自国語の文学伝統の中にある適當な手本をまず必要としたであろう。文学は自分勝手に無からつくりあげるわけに行かず、最初は頼れる過去の遺産ないし同時代の評判作を求める事になる。長い語り物の文学を書くのだとすれば、自分の手近にある作品、とくにロマンスに目を向けるのがごく自然の成り行きだろう。ロンドン近辺には S-E Midland 方言で書いたロマンスがすでにある。The Romaunt of the Rose および The Book of the Duchess とそれらのロマンスを比較してみると、Chaucer はロマンス特有の用語やライムをかなり利用しているのがわかる。⁽⁸⁾ その外に、Chaucer の語いにはかなり高度に

知識的なものが数多く見受けられ、彼の若かりし頃の学識の豊かさと才気のみなぎりが強く感じられる。フランスでロマンスなどの物語文学が栄えたのは、イギリスよりも 1 世紀以前も昔の出来事である。大都会ロンドンに住み、幼い頃より宮廷生活になじんでいた Chaucer は、新しい同時代のフランス文学に早くから親しく接し、その影響を決定的に受けていたので、東や西の地方で流行しているロマンスはすでに過去の遺物だと考え、それほど興味をもたなかつたであろう。ただ英語で表現する必要上、ロンドンの文学語を確立するために、ロマンスの常套的語句や脚韻群を利用したけれども、それによってもられるべきその内容にはさして興味をいだかなかつたであろう。彼はもっとよい high-brow な物語を作ろうと考えただろう。なぜなら彼や彼の聴衆である宮廷人は、心理面の深みのうすい、主人公たる騎士一人の行動を中心とする従来のロマンスの内容にあきたらず、「愛」の主題を基調とする物語文学や、それと全く対蹠的な現実的説話文学を好んでいたからである。しかしながら、ロマンスが Chaucer 文学の出発点、彼の文学創造の源泉となつたと言つてもよいだろう。

Chaucer は short couplets で書きはじめたが、その後は、短詩を除いて、物語文学ではあまり多くの詩型を試みることはなく、Monk's Tale stanza (ababbcbc) と six-line tail-rhyme stanza of Sir Thopas (aabaaab or aabccb) 以外には rhyme-royal と heroic couplets (ほかに散文) を大作の大部分で使用しているだけである。

Chaucer は物語文学に終始密着していたからロマンスとのつながりは、時により強弱があったとしても、一生消えることはなかつた。そして過去や現在の色々な文学を栄養素として身につけ、従来からある文学の殻を次々にうち破つて彼独自の文学を築きあげ、ロンドンを一举に、イギリス文学の中心地にさせた。ロマンスへの言及は彼の書いたものの中に数多く見出せる。“Alexander”, “Arthur”, “Gawain”, “Lancelot”, “Tristram and Isolde”, “Charlemagne”, “Roland”, “Octavian” などがその主なものである。⁽⁹⁾ 地方言文学の動きについても彼は敏感に察知していたらしい。頭韻詩のことは、いくつかの批評めいた言葉や実際に作品の中に頭韻詩

特有の文体を利用していることでもわかる。⁽¹⁰⁾ 12-line tail-rhyme については、それを parody 化した *Sir Thopas* によって最もよく知られている。⁽¹¹⁾ 後半になると、このように出発点となった初期のロマンスを、自分の一段と高い立場から見事に使いこなして批評のできる段階に達しているのである。この *Sir Thopas* は、Laura H. Loomis によれば、Auchinleck MS にある *Guy of Warwick* に多くを負っており、*Franklin's Tale* も同写本中の *Lai le Freine* や *Sir Orfeo* との密接な関係が読みとれることから、Chaucer はこの写本を手許において見ていたと言われている。⁽¹²⁾ この写本は種々様々な18篇のロマンスに宗教もの等を加えた44篇もの大きな anthology で、正に小さな図書館を呈し、金持の文学好きの人のために、ロンドンの出版工房ともいべき所で数人の写字生によって書かれたものとされている。現存するロマンスの写本はほとんど15世紀に書かれたもので、15世紀は写本製作の時代と呼んでも差支えなく、資産階級の需要の激増にともなって15世紀後半には今日的印刷本が生じてくることになる。

ロマンス collection の重要な写本は Auchinleck MS の外に、Robert Thornton MS (Lincoln Cathedral MS A. 5.2) (1430—40) と MS Cotton Caligula A. ii が挙げられる。前者は Yorkshire の East Newton の莊園主 Thornton というずぶの素人が楽しみのためにいろいろの方言で書かれた10篇のロマンスのほかに宗教ものなど全部で77篇を書き写し、友人間に回覧したものであろう。後者は9篇のロマンスを含む12篇の長篇物語を主体とした、39篇を書き写したもので、1446—60年にある修道院で一人の写字生が書いたと言われている。⁽¹³⁾ *Owl and Nightingale* や *Harley Lyrics* でもわかる通り、修道僧の間にも世俗文学愛好者が存在した証拠である。西部や北部で流行した頭韻詩は地方貴族階級が読者であったらしいし、一方東部・南部のいわば世俗小説とも言うべき 12-line tail-rhyme や short couplets の romances は中産階級の gentry が愛読者であったろう。⁽¹⁴⁾ ロマンスは元来、一人の騎士の武勇伝に恋愛や異国・超自然的要素をからませた物語を、その作品中の表現に残っているように旅の minstrels が王侯貴族金持の広間や町の広場・宿屋などで聴衆に語ってきかせたもので

あるが、写本に定着させている以上、minstrels のおぼえ書であるほかに、純然たる読者も存在していた。現在しているロマンスは大多数、一応評判のあった物語で、僅か1冊の写本中に保存されているのが普通であるが、特に評判だったものは5冊以上の写本に書かれて残っている。

(2)

(1) 1300—1325

a) short couplets

[1] Robert Mannyng's *Handlyng Synne* (4 MSS.)

1303 N-E Midl.

[2] *The Cursor Mundi* (7 MSS.) 1300—25 N.

[3] *The Seven Sages of Rome* (9 MSS.) Kent, S-E Midl, N

b) その他

⟨4⟩ *Harley Lyrics* c. 1300 W Midl.

⟨5⟩ *The Gospel of Nicodemus* 12-line stanza

1300—25 N.

⟨6⟩ William of Shoreham's poems (fl. 1320) Kent

(2) 1325—1350

a) short couplets

[1] *The Prick of Conscience* (31 MSS.)

1330—49 N.

[2] Robert Mannyng of Brunne's *Rhyming Chronicle* (5 MSS.) short couplets+alexandrines in couplets 1338 E Midl.

b) その他

⟨3⟩ Laurence Minot's poems 1333—52 N.

c) prose N.

④ *Aȝenbite of Invylt* 1340 Kent.

⑤ Richard Rolle of Hampole: *The Form of Perfect Living* (38 MSS.) after 1348 N.

Ego Dormio et Cor Meum Vigilat (12 MSS.)

c. 1343 N.

(3) 1350—1375

a) short couplets

[1] *The Romaunt of the Rose* 1360—68 London

[2] *The Book of the Duchess* (3 MSS.) 1369 London

- | | | | |
|-------|---|----------------------------|-----------|
| b) | alliterative long lines | | |
| ③ | <i>The Parlement of the Thre Ages</i> | 1350 | N-W Midl. |
| ④ | <i>Wynnere and Wastoure</i> | 1352—53 | N-W Midl. |
| ⑤ | <i>Piers Plowman</i> A version (17 MSS.) | c. 1370 | S-W Midl. |
| ⑥ | <i>The Pearl</i> (12-line stanza) | c. 1370 | N-W Midl. |
| ⑦ | <i>Patience</i> | c. 1370 | N-W Midl. |
| ⑧ | <i>Cleanness</i> | c. 1370 | N-W Midl. |
| c) | その他 | | |
| ⟨ 9 ⟩ | <i>The York Plays</i> | c. 1360 | N. |
| d) | prose | | |
| ⑩ | <i>The Cloud of Unknowing</i> (15 MSS.) | c. 1350 | E Midl. |
| ⑪ | <i>The Travels of Sir John Mandeville</i> (34 MSS.) | 1355—66 | S-E Midl. |
| (4) | 1375—1400 | | |
| a) | short couplets | | |
| 〔1〕 | <i>The Hous of Fame</i> (3 MSS.) | 1378—80 | London |
| 〔2〕 | <i>The Confessio Amantis</i> (43 MSS.) | 1390, revised 1393 | London |
| b) | alliterative long lines | | |
| ③ | <i>Piers Plowman</i> B version (16 MSS.) | 1376—79 | S-W Midl. |
| ④ | <i>St. Erkenwald</i> | c. 1386 | N-W Midl. |
| ⑤ | <i>Piers Plowman</i> C version (19 MSS.) | 1393—98 | S-W Midl. |
| ⑥ | <i>Pierce the Ploughman's Crede</i> (2 MSS.) | 1393—99 | W Midl. |
| ⑦ | <i>Richard the Redeles</i> | 1399 | W Midl. |
| c) | rhyme-royal or heroic couplets (Chaucer) | | |
| 〔8〕 | <i>The Parlement of Foules</i> (14 MSS.) | 1381—82 | London |
| 〔9〕 | <i>Troilus and Criseyde</i> (16 MSS.) | 1385—87 | London |
| 〔10〕 | <i>The Legend of Good Women</i> (12 MSS.) | heroic couplets
1386—87 | London |
| 〔11〕 | <i>General Prologue</i> and the earlier <i>Canterbury Tales</i> (83 MSS.) | 1387—92 | London |
| 〔12〕 | The later <i>Canterbury Tales</i> | 1393—1400 | London |

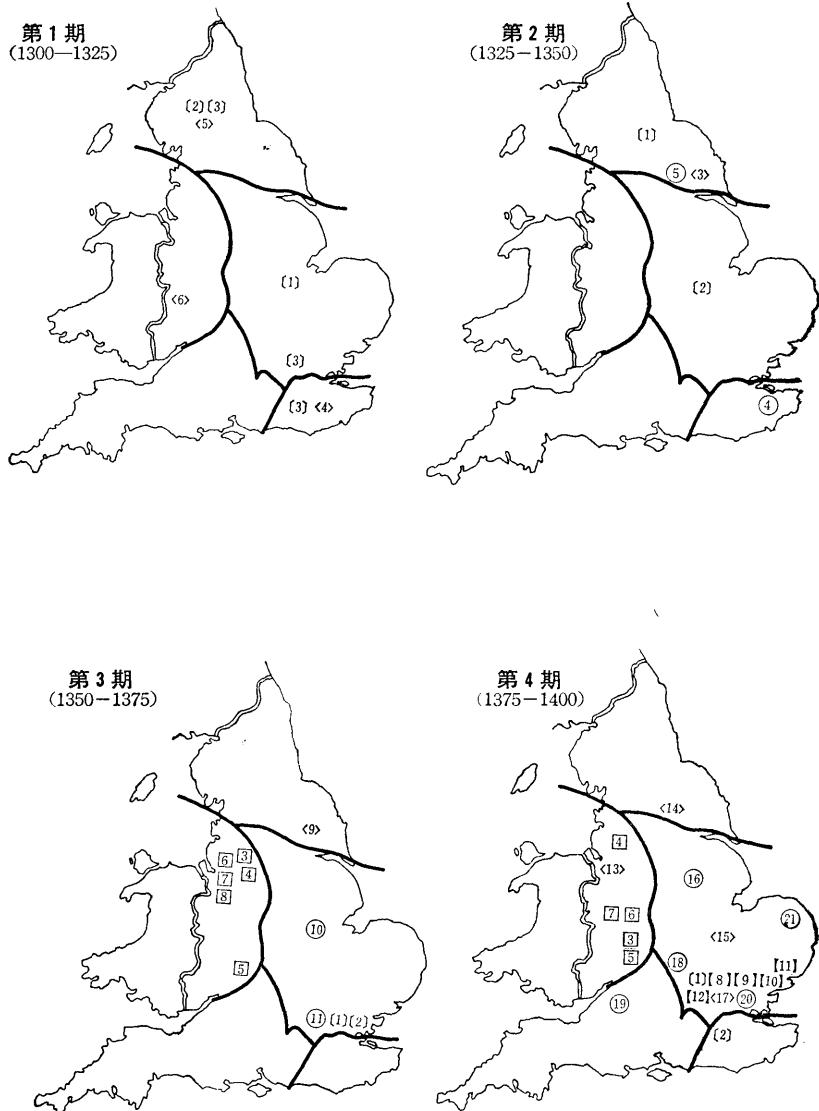
d) その他			
⟨13⟩ <i>The Chester Plays</i>	1375—1400	W	Midl.
⟨14⟩ <i>The Wakefield Plays</i>	1380—1400	N.	
⟨15⟩ <i>Vernon-Simeon Lyrics</i>	1380—90	E	Midl.
e) prose			
⑯ Walter Hilton, <i>The Scale of Perfection</i> (many MSS.)		N-E	Midl.
⑰ <i>Boece</i> (10 MSS.)	1380—86	London	
⑱ John Wycliffe, <i>the Wycliffite Bible and Sermons</i>	1380—84	S-E	Midl.
⑲ Trevisa's Translation of <i>Higden's Polychronicon</i> (4 MSS.)	1387	S.	
⑳ <i>Astrolabe</i> (22 MSS.)	1391—92	London	
㉑ Julian of Norwich, <i>Revelations of Divine Love</i> (4 MSS.)	1390年代	E	Midl.

ここで取扱ったのは、抒情詩やその他のこまかいものをほとんど除いて、概括的で文学的選択をしているのではっきりした結論的断定は下せないけれども、大体の傾向は示せたのではないかと思う。

第1期、第2期はともに文学活動が全般的に不活発である。あるいは英語でものを書くことがまだそれ程積極化されていないためかもしれない。作品は主として南北を含めた東部地方、short couplets によるもので、また大部分宗教的作品である。R. H. Robbinsによれば、商人・聖職者・宮廷などの上層階級を対象にする場合と世間一般を対象にする場合とでは使用する詩型が違うということである。前者の娯楽用または教訓詩・宗教詩用には rhyme royal か ballade stanza が用いられ、一方後者の場合には tail-rhyme stanza, quatrains, couplets が用いられた。前者でも実用の目的の場合には quatrains や couplets が使用された。⁽¹⁶⁾

第2期では北部に mysticism が現われ、後に E Midlands に波及して行く兆を見せている。またラテン語あるいはフランス語を翻訳した散文が出てきている。

第3期になると北から南西までを含む西部一帯で頭韻詩が盛んに書かれ、Alliterative Revival が目立つ。風刺詩、寓意詩、宗教詩が主である。一方、ロンドンで漸く本格的な文学活動が見られるようになる。



第 3 図

第4期は14世紀で一番多くの作品を世に送りだしている。西部の Alliterative Revival は依然継続している。この動きはさらに北に延びて Scotland に及び、また次の世紀に伝えられる。これまでほとんど文学的に見るべきものがなかったロンドンの活動が、急に活発になって、イングランドの中心の感を呈してくる。この活動の源は Chaucer と Gower に集約される。あるいはこれまでの過去の要素がロンドンに集中し、Chaucer によってまとめあげられ、次代の Chaucerians に伝えられたと言えるかもしない。東部では Richard Rolle の影響を受けて Hilton や Dame Julian of Norwich などの神秘家が次々に現われたが、時期を同じくして大陸でも Eckhart, Tauler, Ruysbroeck などが出てる。両者には何か密接な関連があるようと思われる。北方では、今日作品が散佚してしまった Coventry や Beverley を含めて York, Chester, Wakefield などでのいわゆる Corpus Christi Plays が盛んで、15世紀にその全盛期を迎える。宗教劇は教会が庶民と身近かな接触のある唯一の文学活動で、それゆえに、同業組合に芝居をやらせてもその根本的な監督権は教会当局が後々までしっかり握っていた。劇では各種の詩型が試みられ、後になるほど複雑な技巧的詩型が用いられており、これは詩型の一般への普及を証拠だてている。

最後に、作品の書かれた地方言とその地方との結びつきについて一言しておかねばならない。両者は単純に結びつきそうで、必ずしも合致しない場合がよくあるからである。それは、原作者の書いた写本がほとんど現存しない上に、原作（者）と読者の間に写字生（scribes）が介在するためである。14世紀には北部や東部からロンドンへの著しい人口移動が認められる。⁽¹⁷⁾ ロンドンには東北人らがかなり流入しているのである。修道院とは別に、民間人のはじめたロンドンや二つの大学町の写字生の場合にも、この現象が当然考えられる。たとえばロンドンで作成されたと言われる Auchinleck MS を取上げてみると、ロマンスだけでも方々の地方言の作品が入っている。（南部）Sir Beues of Hamtoun, Lai le Freine, Sir Orfeo, Arthour and Merlin, King Alisaunder; （中東部）Guy of Warwick²,

*Otuel, Amis and Amiloun, King of Tars; (北中部) Guy of Warwick¹, Horn Childe, Roland and Vernagu; (西部) Sir Degare, Sir Amadace*などである。これらのロマンスについては、写字生が原作を忠実に書き写した場合、写字生が自分の方言を用いて書き写したり、書きなおしたりした場合、写字生が原作を写しながらも自分の方言や文体のクセが無意識のうちに入り混ってしまった場合、写字生自身が原作者になってフランス語の種本から訳しながら創作した場合、原作がわかりにくい方言だった時写字生がわかりやすい標準英語に書き改めた場合、依頼者の注文に応ずる場合など、いろいろの筆写条件が考えられる。

また *Piers Plowman* (52 MSS.) は W Midland 方言の頭韻詩である⁽¹⁸⁾が、詩人が Worcestershire の Malvern Hill でみた夢という設定であるにしても、そこで描かれている大部分はロンドンにおける様々な出来事である。これは W. W. Skeat も言うように、W Midland 地方出身の貧しい僧侶がロンドンで書いたものだろう。B version は大体 Midland で、Southern forms がまぎり、C version も大体 Midland で、Western forms がかなりまぎり Northern も入っているという。従って West Midland からロンドンにかけての地域で学僧や金持の知識人によって主に読まれているばかりでなく、Northumbrian 方言に書きなおしたり Northern forms の非常に多いもの⁽¹⁹⁾、E Midlands に確実にあったとされる写本⁽²⁰⁾がいくつかあったことから、それらの地方でも読まれていたことが推測される。

83 MSS もある *The Canterbury Tales* も、その大部分は E Midland 方言で書かれているが、Manly-Rickert によれば、Northern forms の非常に多い写本 2、W Midland forms に少数の Northern か Southern を混えたもの⁽²¹⁾、W Midland forms に多くの Northern を含むもの 6 を挙げている。W Midland で書かれたと推定されるもの 5、西部地方のある特定の富裕貴族階級の手許にあったと推測している写本が 11 ある。⁽²²⁾つまり頭韻詩の盛んな地方でも、中央の Chaucer の文学がよく読まれ、彼を有名にしていたことを証明している。このように、世間の需要に応じてロン

ドンの書店は各地方出身の専門の写字生を使って本をどしどし作り, *The Canterbury Tales* の写本については 1450—70 年代のものが最も多いとされているが, この時期は丁度印刷術が始った時期とほぼ一致する。こういう組織的制作の外に, 各地方でも写本が書かれ, 家宝のように大切に扱われ, 有名な作品になると, 都会をはなれた遠い地方でも原作の書かれた地方と変らずに中産階級以上の人々によって読まれていた事実を我々は知るのである。文学活動が地方的規模からロンドン中心の国家的規模になってきたこと, また oral delivery が原則であった古い文学形態から, 読書による近代的な文学形態への脱皮・移行をここに見ることができる。

最後に付言するならば, Chaucer 文学の次の世紀に与えた影響は決定的であり, 15 世紀は English Chaucerians および Scottish Chaucerians を数多くうみだしている。

(注)

- (1) Trounce, 'The English Tail-Rhyme Romances', *Medium Ævum*, I (1932), 87-108, 168-182; II (1933), 34-57, 189-198; III (1934), 30-50. 厨川文夫「中世の英文学と英語」(東京, 昭和26年), 187-198; "Chaucer と地方言文学", 「英語青年」Vol. CVIII, No. 3, 125-26; No. 4, 194-95; No. 5, 250-51; No. 6, 318-19. A. C. Gibbs (ed.), *Middle English Romances*, (London, 1966), 'Introduction,' 23-27. A. C. Baugh, "The Middle English Romance: Some Questions of Creation, Presentation, and Preservation", *Speculum*, Vol. XLII (1967), 1-31. なお, この拙論の内容的肉付けは, Derek Pearsall, "The Development of Middle English Romance", *Mediaeval Studies*, Vol. XXVII (1965), 91-116 で試みられている。(頭韻詩は除外)。
- (2) A. J. Bliss (ed.), *Sir Launfal*, (London, 1960), p. 33 によれば, 主として使われた脚韻は aabccbdbbeeb, ついで 4 作品が aabaabccbddb, 1 作品が aabaabccbccb である。
- (3) A. C. Gibbs, *op. cit.*, p. 24. Trounce, *op. cit.*, II, p. 40.
- (4) Trounce *op. cit.*, II, p. 44 ff.
- (5) 厨川文夫「中世の英文学と英語」, 165-66.
- (6) J. R. Hulbert, "A Hypothesis Concerning the Alliterative Revival", *MP*, XXVIII (1931), 405-22. 頭韻詩作成の素材となった貴族たちの蔵書に Elizabeth Salter は注目している。 "The Alliterative Revival I and II", *MP*, Vol. LXIV (1966), 146-50 and Vol. LXV (1967), 233-7. さらに, John of Gaunt と *Sir Gawain* との関連および貴族や役人がひんぱんに口

ンドンと地方の間を往来していた点を強調している。J. P. Oakden, *The Poetry of the Alliterative Revival* (1935, Manchester, reprinted 1937), 104-5. *William of Palerne* は Sir Humphrey de Bohun の命で、フランス語から訳したものである。なお、Robert Mannyng は、頭韻詩を “strange Inglis” と呼んでいる。(L. D. Benson, *Art and Tradition in Sir Gawain and the Green Knight*, New Jersey, 1965, 123-24.)

- (7) A. C. Gibbs, *op. cit.*, 26.
- (8) D. S. Brewer, “The Relationship of Chaucer to the English and European Tradition” (D. S. Brewer (ed.), *Chaucer and Chaucerians*, London and Edinburgh, 1966), 1-30. これに関するこまかい研究は近い将来にまとめてみる予定である。
- (9) Eleanor P. Hammond, *Chaucer: A Bibliographical Manual* (New York, 1933), 75-76.
- (10) F. N. Robinson が *The Parson's Prologue* (X. 43) につけた注解 (ed², Boston, 1957, p. 765) によれば, “geeste” は頭韻詩で物語ることを意味し, “prose” や “rime” と区別していると言う。頭韻詩の効果を出している場面として知られているのは, *The Legend of Good Women*, I. *The Legend of Cleopatra*, 635-48 と *The Knight's Tale*, I. 2602-16 である。いずれも戦闘の描写場面である。
- (11) Laura H. Loomis, “Sir Thopas”, (W. E. Bryan and G. C. Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales*, New York, 1958, 485-559).
- (12) Laura H. Loomis, “The Auchinleck Manuscript and a Possible London Bookshop of 1330-1340”, (*Adventures in the Middle Ages*, New York, 1962, 150-87); “Chaucer and the Breton Lays of the Auchinleck Manuscript”, *ibid.*, 111-30; ‘Chaucer and the Auchinleck MS: “Thopas” and “Guy of Warwick”’, *ibid.*, 131-49.
- (13) F. E. Richardson (*Sir Eglamour of Artois*, EETS. 1965, “Introduction”, p. xi) によれば, 10篇のロマンスのうちわけは, tail-rhyme 6 (うち北方もの 2), 散文 1, couplets 1, 頭韻 2 である。
- (14) Edith Rickert (ed.), *Emare* (EETS, 1908, reprinted 1958), “Introduction”, p. xi. ところが F. E. Richardson (*op. cit.*, p. xi) は書店製だという。なお、彼によれば、9篇のロマンスのうちわけは, trail-rhyme 6, 頭韻 3 である。Laura H. Loomis は、この写本の14世紀の原本も Chaucer は利用しただろうと考えている (“Sir Thopas”, p. 488)。
- (15) D. S. Brewer, *op. cit.*, pp. 10-14. なお、エリザベス朝のロマンス読者層については E. H. Miller, *The Professional Writer in Elizabethan England*

- (Cambridge, Mass., 1959), pp. 77-82.
- (16) R. H. Robbins (ed.), *Secular Lyrics of the XIVth and XVth Centuries*, (Oxford, 1955), “Introduction”, xlix-li.
- (17) J. C. Russell, “Mediaeval Midland and Northern Migration to London, 1100-1365”, *Speculum*, Vol. XXXIV (1959), 641 ff.
- (18) E. T. Donaldson (*Piers Plowman: The C-Text and Its Poet*, 1949; 1966, New York, “Appendix A: The MSS of Piers Plowman”, 227-30) によれば, 写本の数は A version 17, B version 16, C version 19 で, その中には, 同一写本が A version+C version でできているもの 6, A+B+C が 1, C+B が 3 を含んでいる。
- (19) W. W. Skeat, *Notes on Piers the Plowman* (EETS. OS. 67), London, 1877, p. 4. また, *St Erkenwald* の作者も, *Wynnere and Wastoure* の作者も, 作品によればロンドンに関係がある。
- (20) W. W. Skeat (ed.), *Piers the Plowman* (Oxford, 1886; 1924), Vol. 2, pp. lvii-lviii.
- (21) George Kane (ed.), *Piers Plowman A Version* (London, 1960), pp. 5, 9. W. W. Skeat, *op. cit.*, p. lxx. なお, 読者については, J. A. Burrow, “The Audience of Piers Plowman”, *Anglia*, Vol. LXXV (1957), 373-84.
- (22) George Kane, *op. cit.*, pp. 3, 7, 11, 14,
- (23) J. M. Manly and E. Rickert, *The Text of the Canterbury Tales* (Chicago, 1940), Vol. I, p. 550.
- (24) J. M. Manly and E. Rickert, *ibid.*, pp. 552-3.
第2図と第3図の地図は, F. Mossé, *A Handbook of Middle English* (transl. J. A. Walker), Baltimore, 1952 の “Introduction” の前につけられた Moore-Meech-Whitehall 作成の ME 地方言地図を利用した。